



ジュニア大使友情使節団

“パラオ班”2回目の実施

ジュニア大使友情使節団は、多感な子どもたちが国際理解を深め、世界の中の日本について学び、平和を希求する人に育って欲しいという願いから1985年に創始され、平成24年度で28年目を迎える。

昨年の春に続き、“自然環境と平和”をテーマにパラオ共和国で活動するパラオ班を実施した。パラオでは、一般家庭でのホームステイや学校での交流、ペリリュー島での平和・自然学習、さらには日本国大使館訪問、国会議事堂などの見学を行った。

ここに参加しての感想を団員3名に語ってもらう。

まつだ たくと
松田 拓人

東京都・多摩市立青陵中学校3年

今回パラオに行き日本では体験できないことをさせてもらいました。

僕は2、3年後には海外に留学した

いているのですが、ホームステイ、学校の雰囲気など不思議に思っていることが沢山ありました。今回パラオに行き自分の中で不思議に思っていた多くの事を体験することができました。そして自分で体験することができたおかげで、国によって多少の違いはあると思いますが、自分なりに外国はどういうものなのかということが分かりました。同時に、自分が思ってもいなかったことや知らなかったこともパラオに行き学びました。色々理解し学んだだけでなく、今後の自分への課題もはっきりと見つかりました。本当に今回の体験は自分にとってかけがえないものになったと思います。

この体験で学んだことや今後の自分への課題をしっかりとこなし、がんばって行きたいと思います。本当にありがとうございました。

つちやま まゆ
土谷 真由

埼玉県・私立西武台千葉中学校3年

私は今回ジュニア大使としてパラオへ行き、たくさんのことを学びました。

滞在2日目、私達は国会議事堂で政府の方に会ったり、日本大使館でお話を聞いたりできました。これらは普通なら絶対にできない貴重な体験で、ためになりました。3日目は船でペリリュー島へ。戦没者のお墓の前で手をあわせたり、傷跡を生で見たりしました。歴史に詳しくない私でも、現地に行くこ

とで心が痛みました。4日目は学校の子どもたちとふれあい、5日目はホストファミリーときれいな景色をみました。最後の別れのときは涙が出そうでした。ホストファミリーの皆さん、ありがとうございました。

書き切れないほどの良い体験をしました。ジュニア大使としてこの体験を多くの人に伝えることで、もっと多くの人にパラオを知ってほしいです。

こばやし みき
小林 実樹

埼玉県・埼玉大学附属小学校3年

「また行きたいなあ、パラオ！」

私は日本に帰って来てから、何度も思います。そう思えるのは、パラオにたくさん思い出があるからです。

学校訪問では、たくさんのお友達ができました。ペリリュー島では、大自然を感じることができました。国会議事堂や日本大使館にも行きました。でも一番の思い出はホームステイです。もしホームステイがなければパラオの人達と仲良くなれなかったかもしれない。私は身振り手振りも使って、ホストファミリーの人達と一緒に楽しく、あやとりや折り紙で遊びました。日本に帰って来たときには、パラオの人達を思い出して寂しくなりました。

パラオで作った思い出は何年経っても絶対に忘れません。パラオのみんな、ありがとうございます。またいつかパラオのみんなに会いたいです。

世界万華鏡

日本語教育 ながほ すみお 永保澄雄 シリーズ⑳ ノルウェーのヘムスターさん

大学を出て3年目に、私は住んでいた静岡県島田から京都に引越し、ノルウェー人宣教師ヘムスターさんの秘書となった。秘書と言うと聞こえは良いが、つまりは、彼と彼の教会で必要とする日本語全般の雑用を全てやることになったのである。今から60年余り前のことであった。

教会の私の部屋はヘムスターさんの隣であった。ある晩、夜半に目覚めると、隣の部屋からヘムスターさんのうめき声がした。驚いて耳を澄ますと、それは学校で習ってきた日本語のテキストの文だった。強いショックを受けた。こうして彼は毎晩習ってきた日本語の復習をしていたのだ。

彼の日本語は次第に上手になり、近所の人とも日本語で話せるようになった。日曜学校が開かれたのもその頃である。教会に村の人を集めて、最初の説教も行われた。ヘムスターさんは自分でその原稿を書いた。そして二人でその話し方の練習をした。たとえば次のようにである。

みんなが揃う。

それでまず挨拶をする。

「皆様、本日はよくいらっしやいました。」頭を下げる。

みんなが頭を下げ、その頭が上がって、揃ったところで次の言葉を言う。

これを私が聴衆になって何度もその練習を行うのである。こうしてヘムスターさんの当日の挨拶は大変に好評であった。

日本語の勉強は順調に行ったが、漢字だけはそうはいかなかった。欧米人は漢字が苦手である。

昔、初めて中国に派遣された宣教師たちは漢字を見て、「これは悪魔が作ったものに違いない」と思ったのである。特に欧米人は漢字の役割をローマ字のように考えていたので、字形が複雑なこと、数が多いことにまず恐れをなしたのである。これは私たちの宣教を妨げるためにあるのだということで、漢字を「第二の万里の長城」と呼んだりした。

ヘムスターさんも漢字を同じように考え、その学習には骨を折ったらしい。

私もその学習のお手伝いをしたのであったが、彼は覚える手掛かりがつかめず途方にくれることがあった。私もまだ日本語教師になる前であったので、同じように途方にくれたのであった。しかしいつまでもそうしてはいられないので、「この漢字は日本の聖書に出

てきます」と言うと、彼はまた勇気を出してその漢字に取り組むのである。

さて、この教会にはその最初の1年だけで東京に帰ることになった。母校早稲田大学で留学生に日本語を教えることになったのである。以来60年あまり私は外国人に日本語を教えることになった。

この仕事の中で私は色々なことを教わったが、日本語に上達した人に共通したことがあるのを発見した。それはその最初に日本語学習の覚悟ができていたことである。そしてその学習には決して手を抜かず、それを続けたことである。

私は自分の今までの外国語学習を省みて、大変恥ずかしく思った。そして、せめてはそれを長く続けることにした。今、84歳であるが、旧約聖書をヘブライ語で読もうと思っている。そしてヘムスターさんを懐かしく思うのである。

平成25年4月17日発行
一般社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ502
発行責任者：及川 伊佐子
編集：事務局 03(3582)3021
印刷：音和堂印刷株式会社